

平成22(2010)年3月27日(土)

富山城跡

現地説明会資料



富山市教育委員会埋蔵文化財センター

富山城の歴史概観

◆富山城を取り巻く環境

富山城は、旧神通川と鮎(いたち)川の合流点の西にあり、標高約10mの自然堤防上に立地します。江戸時代以前は神通川が富山城のすぐ北側を流れていました(次ページの図)。当時の川幅は190mほどあったようです。神通川は明治期までこの流路でしたが、洪水の被害が度々生じたため、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越(はせこし)工事が行われました。工事により、富山城の北を流れていた神通川は廢川地となって埋め立てられ、県庁や市役所が建つ市の中心地となりました。旧河道は規模を縮小して、現在松川としてその名残をとどめています。

◆中世(戦国時代)の富山城

最初に城を構えたのは、古記録では放生津(ほうじょうづ)を本拠地とした越中守護代神保長職(じんぼながもと)と伝えられ、天文12(1543)年のことと考えられています。その後、上杉謙信の攻略(永禄3年)、一向一揆の占拠(元龜3年)と上杉の攻略(天正元年)、神保長住の進出(天正6年)、長住の幽閉(天正10年)、佐々成政の入城(天正11年)といった出来事があり、天正13(1585)年に佐々成政を降ろした豊臣秀吉により富山城は破却(はきやく)されます。

神保期の中世富山城の姿を描いたものに、江戸初期に成立したとみられる往来物『富山之記』があります。誇張したとみられる記述が多いものの、三方を二重の濠で囲んだ堅固な城で、西の神通川を搦手(からめて)とした等の記述があります。

中世富山城の位置については、『富山之記』による描写から、星井町の西側に存在したとする説と、現在の城址公園の位置にあったとする説の2説がありました。平成14年度から着手した城址公園の試掘調査で、戦国時代後期の堀跡(薬研堀)・鍛冶工房跡、陶磁器類・茶臼などが出土したことから、中世富山城は現在の城址公園に存在していたことがほぼ確実となりました。

◆近世(江戸時代)の富山城

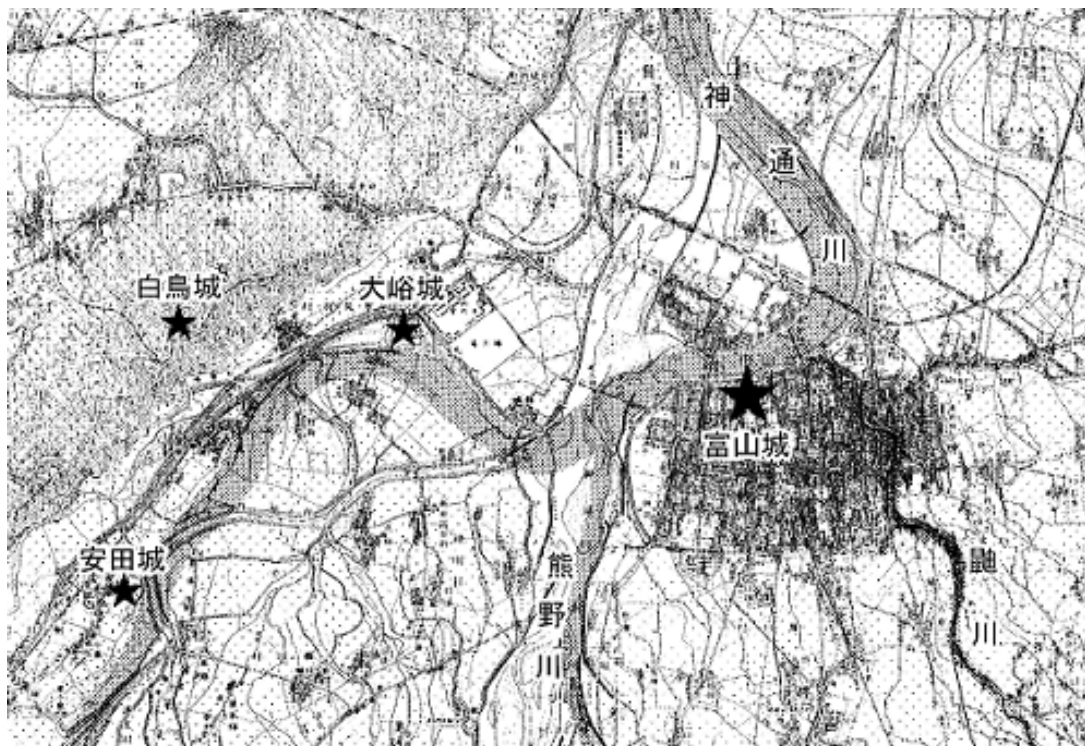
慶長2(1597)年に富山城に入った加賀藩二代藩主前田利長(としなが)は、翌年家督相続のため金沢に移りましたが、慶長10(1605)年、隠居により再び富山城に入ることとなりました。このときに大規模な改修が行われ、富山城は近世城郭として整備されました。ところが、慶長14(1609)年、大火によって富山城は焼失し、その後は再建されず、元和元(1615)年、一国一城令により廢城となりました。

寛永16(1639)年、富山藩10万石が成立します。初代藩主となった前田利次(としつぐ)は、廢城となっていた富山城を居城とし、幕府の許可を得て本格的な整備を行いました。寛文元(1661)年に幕府から修理の許可が下り、本丸御殿は年内に完成しました。本丸御殿は正徳4(1714)年に焼失しましたが、天保4(1833)年に再建されます。

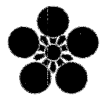
◆近代（明治時代）以降の富山城

明治 6（1873）年、明治政府により廢城令が出されます。堀は埋め立てられ、土塁は崩されるなどして富山城は廢城となりました。本丸御殿は県庁として使用されますが、明治 32 年に起きた大火によって焼失しました。県庁は翌年、城址内に新築されます。しかし、昭和 5（1930）年再び失火により全焼し、その後、松川北側の現在の場所に建て直されました。

昭和 14（1939）年、富山城址は都市計画公園となります。昭和 29（1954）年の富山産業博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に天守閣が建設され、現在は富山市郷土博物館として利用されています。



戦国期の城館と神通川の復元(明治 44 年地形図をもとに古川知明氏作成)



発掘調査の成果

◆あらまし

1. 調査原因：富山城址公園整備に伴う発掘調査
2. 調査面積：370 m²
3. 調査期間：平成 21 年 11 月 5 日～平成 22 年 3 月 31 日（予定）
4. 調査主体：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
5. 工事主体：富山市建設部公園緑地課

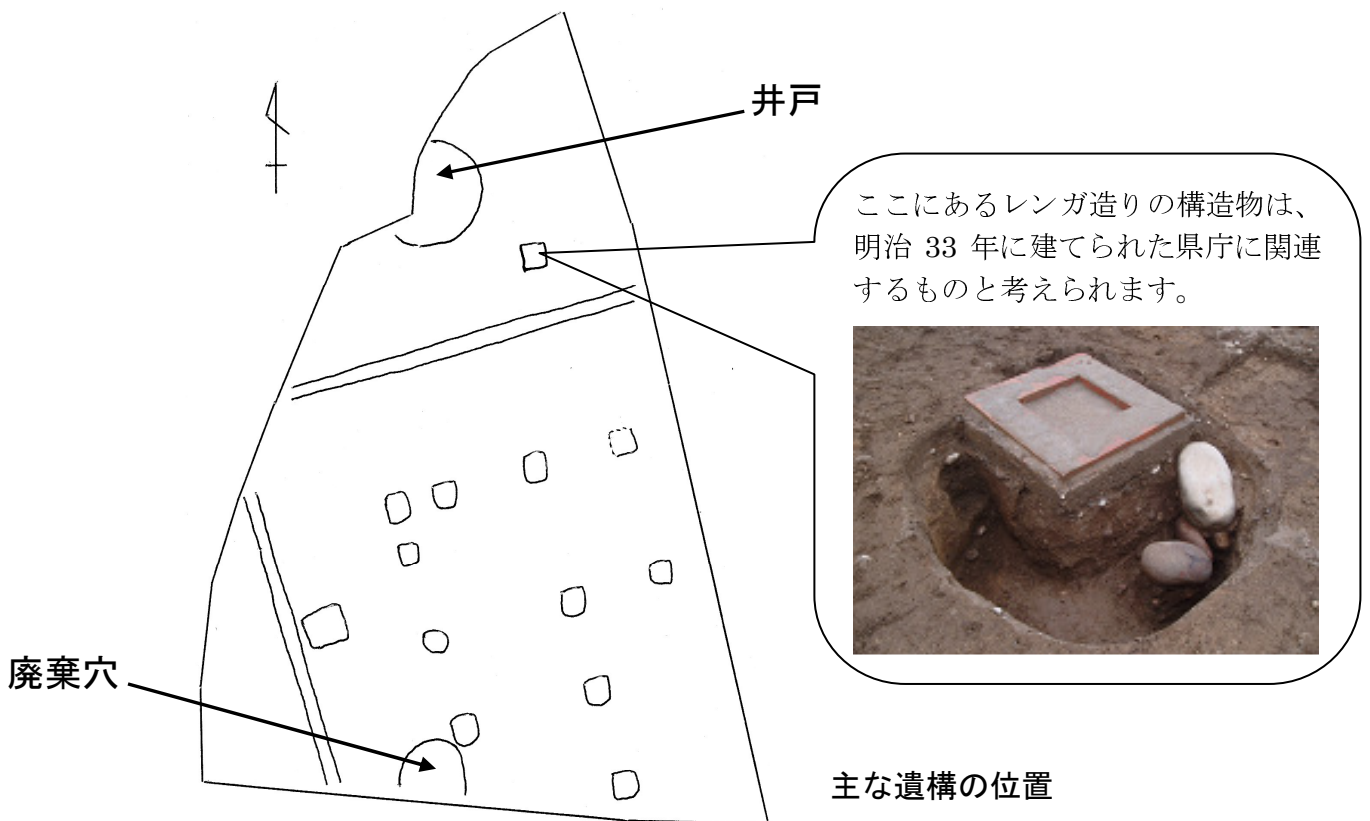
6. 発掘調査のあらまし

富山城は、最初に城が築かれた戦国時代から現代までの層が何重にも重なっています。さらに古い室町時代や平安時代の出土品もあり、富山城の成立前にも人が生活していたことがわかっています。

今回の調査では、明治時代、江戸時代、戦国時代の層まで確認しました。

主な遺構は、明治時代の建物跡や廃棄穴（ゴミ穴）、幕末期の井戸跡、戦国・江戸時代の溝・土坑等があります。

明治時代の建物跡は、絵図等でも知られておらず、今回の調査で明らかになりました。井戸跡は、幕末期の絵図に描かれた屋外井戸の可能性がります。



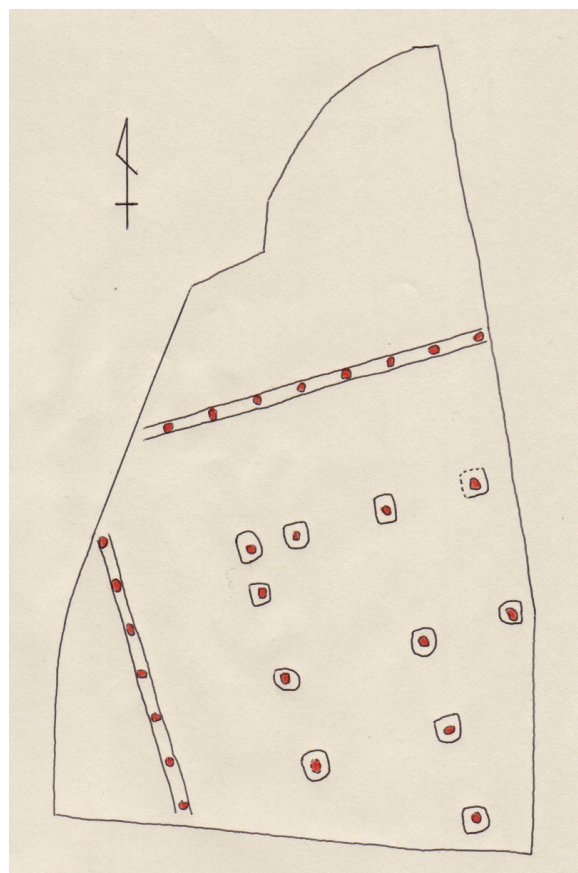
◆建物跡

建物の柱穴が11基見つかりました。明治時代の建物跡と考えられます。方形の柱穴の底に30cm程度の川原石が置かれています。柱穴の深さは本来70cm程度あったと推測されます。この石は、上に立つ柱を安定させたり、沈下を防いだりする目的で置かれました。柱間はすべて1間(約1.82m)を基準に、その倍数間隔(2間・3間など)で建てられています。

また、柱穴の外側は溝がめぐり、溝の中には同じように川原石が1間間隔で並んでいました。この上にも柱が立っていたと思われます。

方形の柱穴が建物本体に伴うものとするなら、溝の中の石は塀など建物に伴う施設かもしれません。

明治32年まで旧本丸御殿を県庁として使用していた頃の付属施設や、旧本丸御殿(県庁)焼失後、県庁が再建されるまでに建てられた建物等の可能性があります。



建物跡の平面図(1/300)
方形の柱穴や溝の中に石がある



溝の中に1間(約1.82m)間隔
で並ぶ石



見つかった柱穴(穴の底に石を置く)

◆廃棄穴—ゴミ穴—

調査区南部で直径約2.8mの巨大な穴が見つかりました。中からは50cmを越える石が多数出土しました。石は焼けたものが多くあり、炭や焼土を多く含んでいました。明治時代の火事で、建物等が焼失した後に、廃棄物（ゴミ）を捨てた穴と考えられます。石は建物等に使用されていたものの可能性があります。



廃棄穴

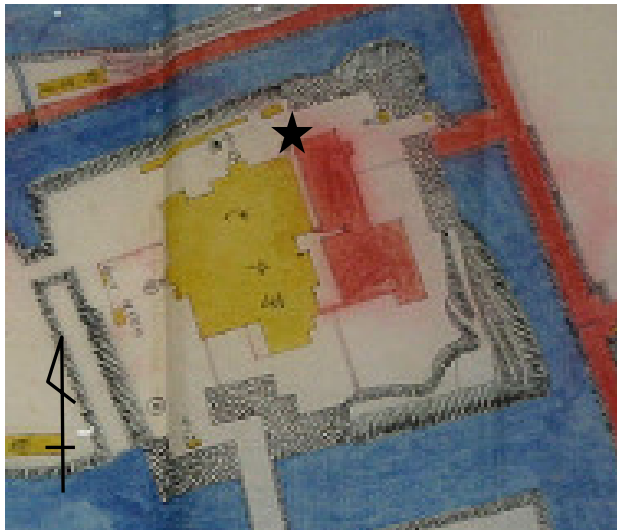
(人と比べると穴の大きさがわかります)

◆井戸—絵図に描かれた井戸か—

調査区北部で見つかりました。直径約3.5mの大きさに復元されます。深さは約2.2mあり、底は水が湧く層（標高約7mの砂質層）まで達しています。水を溜めるための井戸枠は見つかっていません。井戸を使わなくなった後に、井戸枠を抜き取ったと考えられます。

幕末期頃の井戸と考えられます。

下の絵図は、幕末の富山城を描いたもので、中央に本丸御殿が描かれています。本丸御殿のすぐ北側、★の位置に井戸を示す「井」の字があります。今回見つかった井



「越中国城主前田利同城圍の図
(富山市郷土博物館蔵)

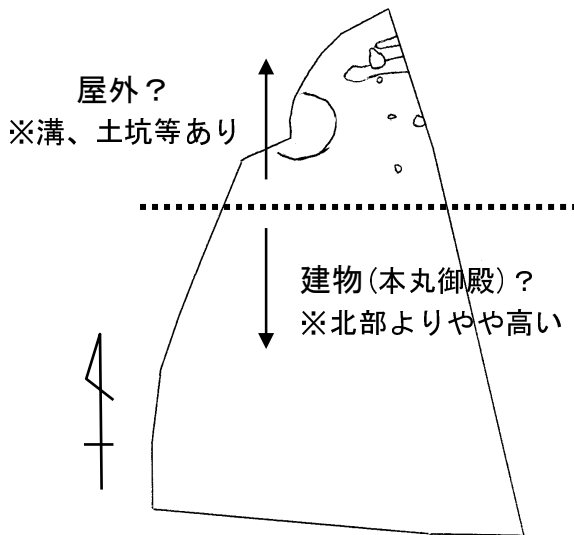


井戸跡

戸より、位置は少し北になりますが、「越中富山御城御絵図」に基づく本丸御殿の位置を参考にすると、発掘された位置に近い位置に復元され、絵図に描かれた井戸と同一のものとなる可能性があります。

◆江戸時代の遺構

調査区北部で、江戸期とみられる溝や土坑が見つっています。一方、調査区南部ではこの時期の遺構がみられないほか、北部よりやや高くなっています。絵図からみると、江戸期はこの近辺が建物（本丸御殿）のある場所とそうでない場所の境になると判断され、遺構のあり方や高さの違いは、こうした土地利用の違いを示している可能性があります。



調査区北部の遺構

◆戦国時代の遺構

戦国時代の面は北と東に向かって緩やかに下がっていきます。

この時代の遺構は溝と土坑があります。いずれも規模が大きく、溝は長さ約8m、土坑は長さ約4m以上あります。特に土坑は深さが約1.5mもあり、急角度で掘られています。

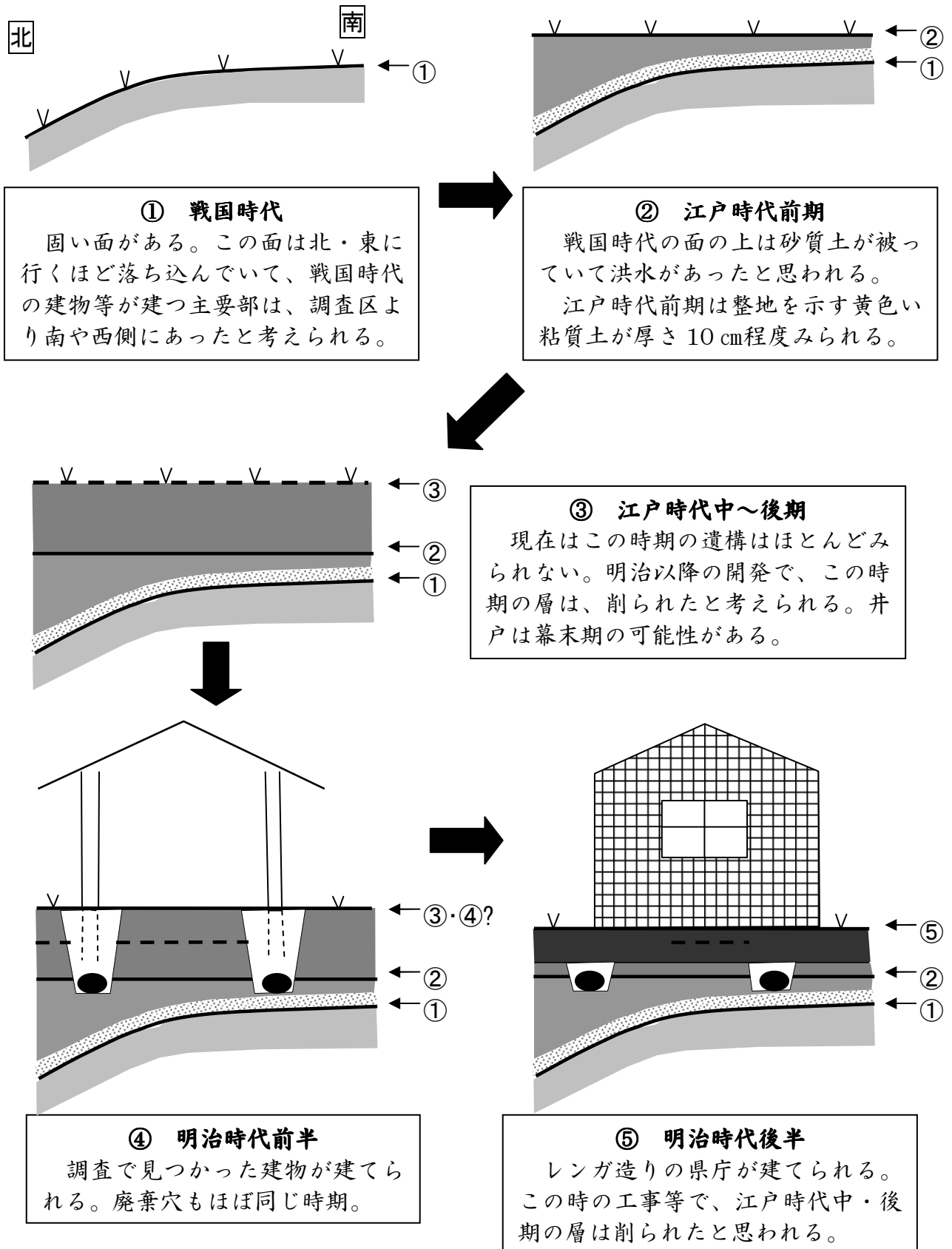


溝



土坑

◆調査地の地形の移り変わり



※今後の調査や検討次第によって、本資料の内容は変わる可能性があります。